

左京一条二坊十六坪の調査

―第472次

1 調査の概要

平城第472次は、奈良市法華寺町内での個人住宅新築にともなう発掘調査である。調査地は左京一条二坊十六坪にあたり、コナベ古墳の南西、木取山古墳北側の周濠想定位置の外側である。調査面積は28㎡で、5月31日に調査を開始し、6月4日に終了した。

2 基本層序

調査区の基本層序は地表から、盛土約10cm、旧耕作土約15cm、水田床土約25cm、黄色粘土層の順であり、黄色粘土層の上面で遺構を検出した。この黄色粘土層は西から東に向かってなだらかに傾斜するため、遺構検出面の標高は西部で71.3m、東部で71.1mである。土層確認のために部分的に掘り下げた部分では、黄色粘土層上面から約5cm下で橙色砂礫土層を確認した。黄色粘土層および橙色砂礫土層は遺物を含まないため、地山と考えられる。

3 検出遺構

SB9470 調査区を横断する掘立柱の柱穴3基分を検出した(図264)。東西方向に並び、間隔が東から約2.4m(8尺)と約3.0m(10尺)であるため、南北棟建物の妻と考えられる。柱穴掘方の平面形は一辺1m程度の隅丸方形を呈する。西側2基では抜取穴を確認し、東側1基では柱痕

跡を確認した。

SD9471 調査区中央東寄りで検出した南北溝。幅約85cm、深さは30cmである。瓦や須恵器、土師器などの遺物を多数包含するが、奈良時代後半より新しいものを含まないため、奈良時代の溝と考えられる。

SP9486 SD9471の東岸で検出した柱穴。西半分はSD9471と、東北部は土坑と重複し、それらより古い。掘方は一辺が1m程の隅丸方形を呈し、内部に抜取穴をもつ。

4 出土遺物

土器 土器の大部分はSD9471出土のものであり、古墳時代から奈良時代後半にかけての須恵器と土師器、埴輪が出土した。古墳時代のものは少量で、土師器の甕、須恵器の杯等があり、大部分は奈良時代の土師器(杯・壺等)や須恵器(杯・壺・甕等)である。

瓦磚類 軒瓦はSD9471から出土した6301Cの1点のみである。丸瓦片は13点(1.710kg)、平瓦片は102点(6.549kg)が出土した。

5 まとめ

本調査で検出したSB9470は東西方向の柱列のみであるが、建物遺構と解釈した。この場合、東の1間は建物の廂に相当すると考えておく。また、多くの遺物が出土した南北溝SD9471が、SB9470およびSP9486の柱穴より新しいことから、検出した主な遺構はすべて奈良時代のものであろう。なお、この溝は現状で想定される条坊側溝や坪境側溝には該当しない。(中村亜希子)



図263 第472次調査区位置図 1:5000

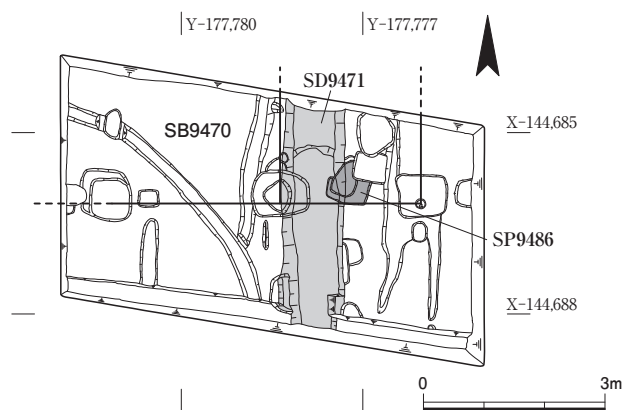


図264 第472次調査遺構平面図 1:125